

GBF x アイドルファイターズ

カオスサイン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世は正に大プラモファイト時代！

アイドル達はそれぞれの思いを胸に頂点を目指していく！

*読者様方からの案も受け付けています

目次

予告編

予告編

1

アイドルフアイターズプロローグ&キャラ、機体設定集

新たなるデビューへのプロローグ

3

本編

アイドル達のガンブラ選択

8

アイドル達の編入とガンブラバトル同好会 前編

13

アイドル達の編入とガンブラバトル同好会 後編

15

異世界アイドルティーチャーの帰還と魔女達の初体験PART I

22

異世界アイドルティーチャーの帰還と魔女達の初体験PART II

25

異世界アイドルとティーチャーは地区予選に出場するPART I

29

異世界アイドルとティーチャーは地区予選に出場するPART II

35

異世界アイドルとティーチャーは地区予選に出場するPART III

39

異世界アイドルとティーチャーは地区予選に出場するPART IV

42

Gミューズバトルフェスティバル！PART I

45

予告編

予告編

「私は何時かお兄ちゃんとも肩を並べられる様になりたい！だから！
…」

「これがボクの描く理想のアイドルプラモビルドファイターですよ
！」

「私がパパの夢叶えてみせるよー！」

「私は私の道を貫く！そう、バトルもね！」

「私達は奇跡の双子！だからこそ一心同体で共にこの業界の頂点へ
！」

「七光りなんて言わせない！だから一層この業界でも輝いてみせる
！」

「わ、私は…バトルを通じて多くの人達と分かり合いたいです！…」

「ガンプラバトルって面白いよねえ〜！」

「私はアイドルもプラモファイターも時代を切り開いてみせる！」

「ウチはこの仲間達と共に楽しめる事が何よりも一番やからな！」

「私が…お父さんが思い描いていた夢を絶対に叶えてみせるんだ！」

お父さんが残してくれた…私とあの人の手で生まれ変わったこの

○○ガンダムで！」

「あたしの夢は死ぬ迄現役でいききたい！」

「お姉様方と一緒にになれる日を夢見て！」

「ガンプラバトル面白いにやー！」

「皆に笑顔と魔法を届けるよー！」

「全力でいかせて頂きます！」

世は正に超ガンプラバトル時代！

アイドル達は専属マネージャーとなった青年と共に一時代を築く
為に奮闘していく！

「先生の為にやってみますね！♡」

「オーダー了承！」

「フン、異世界でも私達の事ちゃんとして見ていないと承知しないからね！」

「わっふっふうー！」

「異世界の魔女…じゃなかったアイドルねえ、こんな面白そうな事見逃せないし勿論やってやるわよ！」

「これが異世界の技術の真骨頂か！実に興味深いな…！」

「先生の世界でも輝ける魔女になってみせます！」

「あの子がやるって言うなら私もやるよ！」

「あーしの本気見せてやるしっ！」

「異世界でも皆の妹になってみせるよ☆」

「あ、あのその…頑張ります…！」

異世界からやってきたアイドル達は更なる時代を築く事が出来るのであろうか?!

という訳でここに新たなるGBF新連載予告です！

主に使うメインは「らぶドル×Lovevery idoi」と「ラピスライツ」(此の花は乙女に関しては推しがいないので今の所は出す予定は一切無い)です。

他のアイドル関係やその他当作者が好きな作品群からも勿論出しますよ！(※あくまで推し以外はプチゲスト扱いとなりますが)

其処で読者の皆様方からもこの作品への出演者及びにオリプラ機体案を大大！大募集をかけさせていただきます！

勿論ガンダム以外の作品からも可です！

詳細に関しては報告版の方にて！レディーゴー！

アイドルファイターズプロローグ&キャラ、機体設定集

新たなデビュへのプロローグ

S i d e ?

「はああ…一体どうしたものかなあ?…」

「どうかしたんですかプロデューサー?」

俺の名は藤沢 智弘。アイドル事務所「スイートフィッシュプロダクション」で上司であり姉でもある藤沢 美樹に半ばアルバイトの様な形で強引に雇われてこの事務所で「らぶドルプロジェクト」にて売り出し育成しているアイドルグループである「らぶドル」のプロデューサー業に勤しんでいた。

だがある時期から多数のライバル事務所から一気に出し抜かれてしまいSFPは赤字の一途を辿る事になってしまった。

その一因ともいえるものが「ガンプラバトル」の急速劇的な普及による物だった。

最早普通に只歌って踊れるだけのアイドルでは時代遅れでしかないのだろうか…漸く目に見えて流石に焦りを見せたと思った姉だったが…

「え…任せるって?」

『そう、私らじゃガンダム?の事なんて一切分からないしアンタなら昔買ってあげた玩具があるでしょう?』

だかららぶドル達のモデルファイター育成の役目もアンタに任せたわ!』

「えちよ!?…姉さん…昔のアレはガンダムじゃなくて全く別物のや…糞っ!切りやがった!…」

なんて事をお願いしてきやがったんだ!

俺も1stガンダムとZガンダムはかなり大雑把な所ぐらいしか分からないぞ…

「という訳なんだよ…」

「あはは…：そういういえば私のお兄ちゃんもガン普拉バトルの大会で優勝経験があるって…」

「本当か?!」

らぶドル第一期生の一人である日渡 あやに愚痴っていたら彼女から思いもよらぬ助け船が出された。

「聞いてみないと分からないですけどね…」

そう言っただけであやは兄に電話をかけた。行った。

それから数分後…

「プロデューサー…：すみませんお兄ちゃん大分バトルのスケジュールが押しているみたいで…」

「あや達に教授していただける様な余裕は無いつて事か…」

「どうでしょう?…」

「とりあえず他のメンバーにも充てがえないか聞いてみるしかないよな…」

「そうですね…」

あわよくばとも思ったが人生そう上手くはいかず俺は仕方無く他のメンバーに聞いてみる事にした。

話はそれからだ。

く有栖川 唯の場合く

「ガン普拉…：ですか?すみませんボクには…：ってその話が出てくるって事はSFPも…」

「どうなるかは分からないが一応な…」

「分かりました…」

く進藤 あゆみの場合く

「え?ガン普拉に詳しい人ですか?私のパパも一応ガン普拉やってみるみたいですけどお世辞にも人に教えられる様な事は…」

「おしいな…」

く浅見 ひびき、大路 しずくの場合く

「ふえ?ガン普拉?遂にうちの事務所もやるの?!」

「見てて面白そうだなとは思っていたから遂にか〜!」

「まだ未確定だから…」

「あ！そういうえば玲ちゃんなら良さげな人知っているかも?!」

「そうそう！ひびきも玲ちゃんがそんな話をしているのを聞いたよ」
「でかした!」

ピッコロの二人から有意義な情報を得られた俺は長澤 玲の所に行った。

「玲!」

「ン?プロデューサー、そないに慌ててどないしたん?」

「ピッコロの二人から聞いたんだが君がガンプラに詳しい人を知っているつてのは本当かい?!」

「ああ、以前のお仕事で会った私のファンの一におったなあ!

それがどないしたん?」

「実はな…」

俺は玲に事の次第を話した。

「ええで!私も興味湧いていたからなあ。

その子に連絡取ってみようか?」

「頼む!」

ファンの一人なら彼女達をないがしろにする事はなさそうだと思
い玲に連絡を取ってみるよう促したのだった。

Side?

「急に大ファンな長澤 玲ちゃんからライン来て何事かと思っただけど
…」

俺の名はサイガ・カガミ、しがな男子高校生ガンプラビルドファ
イターの一人だ。

俺は以前友人に連れられて行ったイベントで仲良くなり大ファン
になったリースクイーンの子から突然連絡が来て驚いたが彼女の指
定してきた場所へと向かったのだが…

「え?...此処って真逆アイドル事務所おー!?!」

招かれた所がなんとアイドル事務所だった事に驚きつつも中
に入った。

「あ!カガミ君や!待ってたでこっちに来てや!」

「あ、はい!」

事務所内で長澤さんが真つ先に俺の姿に気が付いて声をかけてきたので彼女の元へと向かう。

「アイドルだったんですね!…ええっと…今日はどういった御用件で?…」

久し振りに目にした長澤さんに緊張しつつも俺は問いただした。

「実はなウチらの事務所でもガンプライアイドルとしても売り出す方針が決まったようですね…そこでプロデューサーはんがガンプラに詳しい人はおらんかって聞いてきたものだからカガミ君の事を思い出して紹介しようと思つたんやけど…」

「え!?つまりは長澤さん達のアイドルグループの専属ガンプラマネージャーになつて欲しいと?」

長澤さんの話に俺は驚いた。

「駄目やつたかいな?」

「いえいえ!そんな申し出が来るなんて予想外でしたのでビックリしただけです!

でしたらPさんに詳しいお話をさせて下さい!」

「分かった!今呼んでくるから待つとき!」

長澤さんはすぐにPを呼びに行つたのだった。

数分後

「やあ、初めまして!君が玲が紹介した…」

「サイガ・カガミです!今日は大変に良いお話をされて…」

長澤さんが所属するらぶドルのPである智弘さんが経緯を説明してくる。

どうやらガンプライアイドルが世に台頭してきてからも今迄は流行に流されずのスタンスでアイドル活動を続けさせていたようだったがつい先日動画サイトや掲示板に突如アップロードされたとあるプラモPV動画が発端で遂に大幅な客離れが起きてしまい慌てて育成方針を切り替えたようだった。

「ああ、例の噂のあの動画ですか!…あれは凄かったですね!」

確か動画の企画主は俺と同じ高校生のモモガミ・ダイアって言つたっけな。

動画に出てきたオリジナルプラモらの物凄い完成度、オリジナル曲の完成度の高さそして彼の企画に参加していたのが巷で有名なアイドルユニットを含む有名DJユニットらだったのも相まってか一日と待たずに物凄いかんりの再生数を叩き出していた奴だ。

「いやーあのガンプラの完成度はド素人の私の目から見ても凄かったですね！」

「…あのすんません、アレガンプラじゃなくて俺も知らない完全オリジナルの奴なんだと思うんですけど…」

「え？…」

「はあ…」

この事務所大丈夫か？と多少不安を覚えつつも俺は専属マネージャーになる事を決め契約するのだった。

本編

アイドル達のガンプラ選択

S i d e サイガ

突如としてガンプラアイドルとしても売り出す事となったアイドルグループであるらぶドルの専属ガンプラマネージャーに就任する事になって早三週間が過ぎた。

ガンダムについての知識が希薄だったメンバーも最低限レベルにまでは至っていた。

「それでカガミマネージャー、今日はどうするの?」

一期生メンバーである進藤 あゆみちゃんが聞いてくる。

「今回はいいよそれぞれのガンプラの選定だな!

それじゃあ皆、ショップに行くでしょうか!」

「はい!」

俺達はメンバーのガンプラを調達する為ショップへと向かった。

S i d e あや

「うわあー!たくさんプラモデルがありますね!」

「今回は経費で落とせるみたいだから予備機とかも許可出来るよ。

あ、そっちはMGコーナーだから駄目だよ」

「ふえ?」

「え?何か違うんですか?」

お店に並んでいる色とりどりの多くのプラモデルを目にして私達はそれぞれ扱う事となるガンプラを選びに向かう。

そこでカガミマネージャーが真っ先に向かおうとしていたひびきちゃんに待ったをかけた。

「説明しておくべきだったな。

公式大会だとガンプラのサイズ規定があるんだよ。

だからそっちの100/1のサイズは駄目なんだ。

こっちの144/1サイズのHG、RGもしくはスケールダウンのSDコーナーでないと...ああ、ただし今回ビギナーである君達にはR

Gはあまりお勧め出来ないからHGかSDシリーズで選んでくれ
「分かりました！」

カガミマネージャーの説明を聞き、気を取り直して私達はガンブラ
選びに向かう。

「あ、コレ…」

「お？やっぱり日渡さんはその機体を選んだか」

私が目についたのはマネージャーに観せられたガンダム作品の一
つである第08小隊に出てきていたガンダムEz8だった。

「サハリン兄妹の悲しい決別には涙しましたね…」

「ガンダム知らない人がギニアスさん見たら無謀な狂人にしか見えな
いからなあ…事情を知ると和解し合えたifが観てみたいという気
持ちは強いわ。

それよりソレを選ぶのだったら宇宙ステージにも対応出来るよう
にカスタムしないとな！」

「はい…」

私はEz8を手取るのだった。

Side唯

「うーんと…あった！」

らぶドル一期生の有栖川 唯です。

今日は私達の専属ガンプラマネージャーさんとなったカガミさん
の案内を受けてプラモデルショップへとやって来ました。

其処でボクが手にとったのは

「有栖川さんはソレを選んだのか」

「はい！猫さんみたいで可愛いと思ったので！」

「ガイアは猫じゃなくて犬なんだけどね…」

「え？…じゃ、じゃあ猫さんっぽく見えるようにしたいですね！」

ボクが手にしたのはSEEDDESTINYに出てきたガイアガ
ンダムだった。

大好きな猫さんみたいだからと決めていたのだ。

でもマネージャーさんに違うと言われてだったらそう見えるよう
に改造すると決意したのだった。

S i d e あゆみ

やつほー！進藤 あゆみだよ！

私が手にとったガンプラはねー

「進藤さんはそれなんだな」

「うん！私のパパも好きなGラインアサルトタイプ！」

私が選び取ったのはガンダムの量産型機に該当するジムシリーズの中でも特に改造がし易いGラインだった。

「渋い選択だな！」

「よーし！頑張ってカスタムしちゃうぞー！」

S i d e 美奈&知奈

どうも、私達双子の北条 美奈と北条 知奈合わせて「シヨコラ」です！

「美奈姉さん、私これとコレにいたします！」

「なら私はコレとコレね！」

妹の知奈が選んだのは映像化されてないネオガンダム1号機、それとガンダムWに登場したガンダムヘビーアームズ改、そして私が選んだのは関連性が有るガンダムF91、ウィングガンダムゼロカスタムだった。

「絶妙なチョイスだな！」

「マネージャーさんにも私達のコンビネーション見せて差し上げますよー！」

S i d e 紗有紀

「…私はコレかな…」

片桐 紗有紀よ…私が選んだのはナラティブガンダムだ。

「片桐さん…確かに結構な拡張性有る機体だけどそれで大丈夫かい？」

「改造プランはある程度思いついているから問題無い…！」

「なら良いんだけど…」

私はこのガンプラで私を貫くんだ！…

S i d e 瞳子

「これで」

らぶドル二期生、結城 瞳子よ。

私が選んだのはカガミマネージャーに観せられたガンダムWに登場していたパイロットにシンパシーを感じたガンダムサンドロック改EW版、それとウイングゼロカスタムだ。

「お、サンカスに美奈さんも選んだゼロカスタムか！」

「はいー！」

私はコレでアイドル道の遥か高みを目指していくんだ！

Side雪見

「ふえええ…ど、どれにしよう?」

わ、私はらぶドル二期生の成瀬 雪見っていいます!…副業で声優も兼業しています!

私達の専属ガンプラマネージャーとなったカガミさんに観せられたガンダム作品を観て何時か私も出演してみたいなとも思いました。それよりも…私は未だ自身のガンプラ選択に戸惑ってしまっていた。

「まだ選んでいないのかい?」

「ひゃあ!?ま、マネージャーさんすみません!…」

手間取っている私にカガミマネージャーさんが声をかけてきたので驚いて時間を無駄にしてみました。謝罪した。

「成瀬さんが謝る必要なんてないよ。

だって君が選ぶ取るガンプラは生涯の相棒となりえる可能性もあるんだからな!だから悩みぬくんのだ」

「は、はいー！」

マネージャーさんに促され私は選び取ったのは…

「おっ…やっぱりそれか」

「は、はいー!まずはこれから!」

私が選び取ったのはSDガンダムワールドヒーローズに出てきた悟空インパルスガンダムとHGのシャイニングガンダムだった。

どんな改造しようかわくわくするなあ♪

Sideひびき&しずく

やつはー!ユニットピッコロのアタシ達を選んだのはねえ

「しずくはコレ！」

「だったらひびきはコレね！」

ひびきが選んだのはGガンダムに出てきたドラゴンガンダム、しずくが選んだのがガンダム0083に出てきたガンダム試作三号機ステイメンだった。

「早々に決まったみたいだね…ってこれまた珍妙な組み合わせだな…」

アタシ達が選んだガンプラを見たマネージャーが驚いた表情を見せた。

「へっへーん！」

「あつと驚くガンプラにしてみせるよ！」

Side 真琴

「私が選ぶものは既に決まっている！」

藤田 真琴だよ！私が選んだのはガンダムシユピーゲル、それにSDガンダムの佐助デルタガンダム、才蔵デルタカイだよ！

「おお…見事に忍者一色だなあ…」

「お侍さん型も使いたい所だけど今回はこれだけで良いですね！」

Side 玲

「ん…コレにしよっかな！」

長澤 玲や！私が選んだのはカガミく、おつとマネージャーはんと見たガンダムSEEDに出てきたジャスティスガンダムと外伝シリーズに出てきたスターゲイザーガンダムやねん！

「長澤さんはそれか！」

「ふふ♪他の皆も選び終わったみたいやしマネージャーはんの御指導お願いしますで！」

他のメンバーも選び終わったみたいなので私達は事務所に戻って早速制作に取り掛かっていくのだった。

アイドル達の編入とガン普拉バトル同好会 前編

S i d e サイガ

「お、終わったあ〜！」

「お疲れ様…といたい所だけど…」

「ふえ？」

らぶドルメンバー全員のガン普拉制作が終わったのは二ヶ月ちよつと過ぎた頃だった。

「明日から俺も通っている聖鳳学園に編入する手筈になっているからね。」

智弘さんには既に話を通して手続きも諸々済ませてあるから」

「へ、編入ですか？」

「それにせ、聖鳳ってあの世界チャンピヨンの一人のイオリ・セイが在籍していた！…！」

「そう、七年前のイオリ・セイOBの世界大会優勝以来から現在に至る迄に他に好成績を出せている生徒がほとんどいないという事もあつての事か学園側に俺が専属マネージャーとなったガン普拉アイドルとして活動し始めた君達との事を話したら快諾を貰えたのさ」

「もしも私達から世界大会への選出者が出れば学園側にとつても大いに宣伝になるからやね？」

「そうだね」

俺は編入についての説明をすると皆納得してくれるのだった。

そして翌日、彼女達の編入初日、皆をそれぞれの教室に送り届け俺は先生に報告する為に職員室を訪れていた。

「しかし真逆カガミがガン普拉アイドルの専属マネージャーになるなんてなあ…：そういえば既にガン普拉バトル同好会はあるがそこら辺は一体どうする気なんだ？」

「あ…」

先生に言われて漸く思い出す。

ウツカリ失念していたな…：所属部員がプラモ部に大半が引き抜かれてしまったせいで人数もめつきり減ってしまつてすつかり今では

同好会扱いで二年の先輩であるホシノ・フミナ先輩一人がなんとか部長を務めているんだっけか。

「考えていなかったようだね …」

「と、とりあえずホシノ先輩に話をつけてみてから今後の事は考えますわ…」

「そうかあんまり無理しないようにな」

まあホシノ先輩と話をつけた所で十中八句プラモ部の連中が何かしらで絡んでくるのは目に見えているなあ…そう思った俺は今後の方針を思案しながら教室へと戻るのだった。

「おはようございまーす！今日から編入してきたカミキ・セカイっす！」

「あ、あれ？そんな話聞いていないけど…」

「いやあく、本当なら一週間前からの予定だったんっすけどね…」

「一週間前?!」

その直後の職員室でそんな一悶着起きていた事を知らずに…。

そして昼休み、俺は同じクラスに入った日渡さん、進藤さんと話をしていた。

「それで放課後に同好会の部長さんと話をしにいくんですか」

「ああ、その上で俺達と合併するのかが決まる…ただ…プラモ部の部員が恐らく変なちよっかいかけてくるだろうけど…」

「そこはバトルで話をつけるんですよ！」

「あ、ああその通りだ、一括りには出来ない連中な事は間違い無い筈だからな」

そして放課後、俺達三人は同好会の部室である学園の隅に存在する倉庫を訪れたのだが…

「だからガン普拉バトルをやめる気は更々無いって何度も言っているでしょうが！」

入室早々にホシノ先輩のそんな怒声が響いてきたのだった。

アイドル達の編入とガン普拉バトル同好会 後編

S i d e サイガ

「それで…明日の放課後にプラモ部の現部長であるあのキノコヘッド野郎を含む部員達と部の存続を賭けてガン普拉バトルをする事になったと」

「そういう事です…あの本当にバトル部に入部してくれるんですか？」

「ああ、俺を含む九人がな。だがまずはプラモ部との賭けを乗り越えないとな」

「あんなカマキリみたいなヘンテコ頭野郎なんかいつちよ軽ーくのしてやりますよ！俺の次元霸王流の奥義で！」

「ぶふうっ!」

見覚えの無い顔が居ると思ったら彼も編入生だったか。

しかも扱うガンプラがイオリ・セイが使っていたビルドバーニングガンダムの改修機とは…しかも何故かドムの中に入っていたらしい…ホワイ?…一瞬間が混乱しそうになったがイオリOBそこで変な遊び心発揮しなくても…。

「それじゃあ公式戦と同じ3 on 3の様だからあやさんに出てもらおうか」

「助かるわ」

「は、はい！頑張ります！」

今回の賭けバトルに必要な残りのメンバーには一番操縦訓練をレクチャー出来ている日渡さんに出てもらう事にした。

そして翌日の放課後 S i d e あや

「なっ!?!…人数が揃っているだ?!?!…」

プラモ部部长であるミヤガ・ダイキ先輩は予想外だと驚いていました。

そんなに気に入らないのでしょうか？

「怖気づいたんですか？」

「そんな馬鹿な…人数が揃っているといえど加わったのは明らかに素

人の女生徒、恐れる事はないね！」

「それはどうかしらね？」

「あ、あのあんまり喧嘩は良くないですよ？」

喧嘩腰になるホシノ先輩とミヤガ先輩を私はなだめる。

ミヤガはあまりガン普拉バトルに執着していないせいか日渡あやという少女を過小評価しているようだがそれは大いに間違いである事に彼は気が付かない。

「カミキ・セカイ、ビルドバーニングガンダムいくぜ！」

「ホシノ・フミナ、パワードジムカーデイガンいきます！」

「日渡あや、陸戦型ガンダムブラウンハートいきます！」

出撃シークエンスを経て広大な荒野フィールドに私達は降り立った。

「へえ、日渡さんのガンプラは陸戦型ガンダムのカスタム機なのね！」

「えへへ、カガミマネージャーに教えてもらって作り込みましたから！」

ホシノ先輩は私のブラウンハートを見て褒めてくれる。

「先輩達、お喋りはそこまでに！奴等が向かって来ています！」

カミキ君の警告で私達は気を取り直す。

「敵はミヤガ部長のAEUイナクトに副部長さんであるシノダ・エリさんのホビーハイザック、ユウ君のライトニングガンダムか……」

「なら私が副部長さんをやります！」

「だったら俺がユウマを、先輩はあのカマキリ野郎を！」

「分かったわ！」

戦闘の分担が決まり私は副部長さんのホビーハイザックの下へと向かう。

「バトル部…潔く負けを認めてはくれないのね……」

「こつちにだって負けられない理由がありますから！」

私はビームサーベルを取り出してホビーハイザックが繰り出してきたヒートホークと斬り合う。

「くうっ!?!……」

「はああああー！」

私はビームサーベルの出力を上げてヒートホークを弾き飛ばそうと試みる。

が

『そうはいかないわ!』

「!?」

対する副部長さんはヒートホークをわざと押し下げてバルカンを放ってきた。

私は慌てて回避し距離を取ってビームサーベルを仕舞い、今度はビームライフルを取り出して牽制する。

『そんなモノには当たらないわ!』

副部長さんは牽制ライフルを回避し今度はヒートホークを二丁構えながらハイスピードでブラウンハートへと迫ってきた。

だけど…

「甘いのはそちらみたいですけどね」

『え?…:』

私はダブルヒートホークを回避しホビーハイザツクの懐へと潜り込む。

真逆あのスピードで急接近したにも関わらずに回避されるなんて微塵も思っていなかったのか副部長さんは驚愕していた。

「これで終わりですね」

構わず私は180mmキャノンを改造したブラウンハートキャノンを取り出してガラ空きになったホビーハイザツクのボディにゼロ距離で撃ち込んだ事でホビーハイザツクは爆散した。

『そ、そんなあく!?!:』

さてとカミキ君の方は…大丈夫そうですね。

私が味方の様子を確認した時だった。

ズーン!

「!?アレって!?…:」

物凄い地響音が響いたかと思うとホシノ先輩が交戦していたミヤガ先輩のイナクトが最早別物の姿に変化していた。

アレってMA!?!元々機能の無いガンプラのMAへの換装って確か

ルール違反だった筈…私は急いでブラウンハートをホシノ先輩達が戦っている地点まで向かわせるのだった。

S i d e サイガ

「いや…可動区域もロクに広げられないネタ機体のホビーザクでバトルに挑むとか…もしかして最初から勝つ気なんて無かったのかな副部長さんは?」

「いや、副部長くんも勝負に勝つ気ではいた。

それをあの陸戦型ガンダム少女の腕が上回っただけに過ぎんよ」「お?ラルのおっちゃんも話を聞いて来たのか!」

日渡さんの初のバトルを見て俺はそう呟くと隣からどう見てもファーストのランバ・ラルソックリな最早すっかり聖鳳の名物の謎多き用務員と化しているラルのおっちゃんが現れたので俺は声をかけた。

「しかしカガミ君、君はてつきり部には入らずにソロでガン普拉バトルをやるものだと思っていたのだが」

「ああ、ラルさんにはまだ言っただけだったつすね。

俺、この間からガン普拉アイドルの専属マネージャーになったんすよ!」

「なんと!?ガン普拉アイドルの!…よもやそういう訳だったのか…」

ラルさんは俺の言葉に驚きつつも同時にどこか納得したかのような顔をしていた。

「ええ、ですからこれからじゃんじゃん彼女達らぶドルの魅力をプロデュースしていきますよ!」

「む!?!あの機体は!…」

俺がそう宣言した瞬間、ラルさんが何かに気が付く。

それはあのキノコ野郎がMAに換装した光景だった。

「アグリッサだ?!あの野郎ルール無視してきやがったな!…」

S i d e フミナ

「バトル中にMAへ換装するなんて規約違反じゃないですか!」

「何を言っているんだい君は?このバトルは選手権じゃないんだよ?」

「くっ!?…減らず口をー…」

『さあさあ、大人しく負けを認めて僕の部に入るんだよー!』

追い詰めたと思った矢先にミヤガ先輩のイナクトはアグリツサへと換装していた。

思いつ切りルール違反だということにあのカマキリ野郎は開き直って攻撃してくる。

アグリツサの放ってくるレーザーを回避し切れずにジムカーデイガンの砲塔と片腕を潰されてしまう。

「しまった!?…」

『ほらほら!観念するんだよホシノくん!』

不味い!?…今のジムカーデイガンの状態じゃ万全なアグリツサの猛攻に対応し切れない!…こんな所で負けるなんて…ゴメンなさい…バトル部の先輩達の伝統を守り切れなくて…そう諦めかけていたその時だった。

ドゴン!

「!」

『んなっ!?…今の砲撃一体何処から!?…』

何処からともなく恐らくキャノン系の砲撃がアグリツサに直撃して転倒した。

『御無事ですかホシノ先輩!』

「日渡さん!」

その砲撃はバトル部に入部予定で今回のバトルに参加してくれた日渡さんの陸戦型ガンダムによるものだった。

Sideあや

「ホシノ先輩、援護します!」

『日渡さん!副部長に勝ったのね!』

『何!?シノダくんが負けたのか!?…だけどあの妙な技を使う男子をコウサカ君が抑えてくれている今なら君達二人ぐらい!』

援護が間に合い私はほっとする。

一方、ブラウンハートの砲撃を受けて転倒していたアグリツサは体勢を立て直して再び私達に襲いかかってこようとしていた。

だがそこで…

ドヒュン!

『!?!』

何処からともなくビームライフルによる攻撃がアグリツサを掠つていった。

今のは私じゃない…距離的にホシノ先輩でもない事は確かだ。

だったら他にビームライフルを装備している今この場に居る機体は…

『どうして僕を攻撃するんだいコウサカ君!?!』

『え…ユウ君?…!』

そう、敵チームである筈のZガンダムベースのガンプラを操るコウサカ・ユウマ君だったのだ。

『ミヤガ部長、そのガンプラはレギュレーションに違反しています!』

アンフェアなバトルは望んでいないので』

『こ、コウサカ君、う、裏切ったのか!?!この僕を…!』

『裏切るも何もレギュレーション違反をしたのは貴方ですよね』

『ユウ君!…!』

ミヤガ部長さんの絶叫を無視しコウサカ君はビームライフルを撃ち続けている。

『よくも動き回ってくれるな…少しばかり無駄撃ち過ぎたか…だったら!…そっちの陸戦型ガンダム聞こえているな?!』

『は、はい!』

急にコウサカ君から個人通信が入り私は驚くがすぐに応答する。

『此方の残弾が残り少ない…だから此方でミヤガ部長を撃墜可能なタイミングを探るから合図したら其方の180mmキャノンと同時に放つてくれ!』

『はい!』

個人通信が閉じられて私はブラウンハートキャノンを構え直した。

『ホシノ先輩!申し訳無いんですが少しの間だけあのアグリツサの囮になってひき付けておいてもらえませんか?』

『分かったわ!』

ホシノ先輩に陽動をお任せして私はその隙にアグリツサの懐へと潜り込む準備をする。

『糞つくそおっ!?!:』

コウサカ君の突然の裏切りによって彼と囷を買って出たホシノ先輩の対応にミヤガ先輩のアグリツサは追われていて私のブラウンハートの動きには全く気が付いていない。

『!今だ!撃て!』

「はいー」

『な、何!?!:何時の間に懐に!?!:』

漸くミヤガ先輩は懐に潜り込んでいたブラウンハートに気が付くがもう遅い。

私のブラウンハートキャノンとコウサカ君の構えたビームライフルが既にアグリツサを捉えているのだから。

『やっちゃって!』

『く、糞おおおー!?!こ、この僕が!?!:』

『これで終わりだ部長!』

同時に放たれた砲撃の直撃を受けてアグリツサは爆散した。

〈BATTLE ENDED〉

残るコウサカ君が降参した事でバトル終了のアナウンスが鳴りここれで私達の勝利が確定したのだった。

「勝ったー!」

「これで部に昇格出来ますね!」

私としても初の勝利を噛み締められた瞬間でホシノ先輩達とこの喜びを分かち合ったのだった。

こうして私達らぶドルは部に返り咲く事が出来たバトル部に入部するのだった。

あ!あの後コウサカ君がプラモ部を退部してこっちに入部、ホシノ先輩達と選手権のチームを組む事になったみたいだよ。

異世界アイドルティーチャーの帰還と魔女達の初体 験PART I

カガミ・サイガ率いるらぶドルチームが聖鳳学園のバトル部に入部を果たしたその頃、とある世界にて Side？

「本当に帰ってしまわれるんですね…」

「うう…先生行っちゃヤダよ…」

「こらこらラヴィ、別に一生の別れって訳じゃないさ。」

流星にこっちの世界に帰ってこれる時は戻ってくるさ」

「ホント？約束だからね！」

「ああー」

俺の名はミカミ・ソナタ、ドルオタでガンプラビルドファイターだ。

ちよいと訳が有って今は本来学生である筈の俺とはある学園の教師をしていた。

別に飛び級とかした訳ではないぞ？そんな頭の出来じゃないし…。

驚くなよ？俺はある日異世界に召喚されたんだ！…何を馬鹿な事を言っているんだって？そうじゃないと俺が教師をやれている説明がつかないだろう？

俺が召喚されたのは歌や踊りを披露する事で魔法を行使出来る魔女と呼ばれる此方で俗にいうアイドル候補の少女達を育成する為の教育機関だった。

この世界の敵である魔獣を浄化する為の大魔女を育成出来る人材が少ない事と異世界の知恵を借りたいとの事で俺が召喚されたそうだ。

まあ当時帰れない事に納得しなかった俺だったが流星に申し訳無く思った理事長さんであるクロエさんが帰還の術を探してくれるそうでそれ迄の間教鞭を執る事になった訳なのだ。

流星に異世界では元の世界で流行していたガンプラバトルは不可能だろうとがっくり肩を落とした俺だったが教師生活の中で仲良くなった生徒達にガンプラ、ガンダムのお話を話したら興味を持ってく

れる子が多数居てくれたのには幸いだった。

そして俺がこの世界に召喚されて早半年近くが経った頃クロエさんから元の世界に帰る事が出来尚且つ此方の世界に何時でも戻って来れる術を発見出来たとの報告を受けて準備した。

俺が大切だと想った二人の少女を連れて元の世界に帰還する事にしたのだ。

「ソナタ先生、ガーネットの事泣かせたら承知しないわよ！」

「分かってるよ…エミリアも元気でな！」

「ふ、フーン…／＼／＼アンタもね！…」

俺の恋人の一人であるガーネットが組んでいるユニット〈IV K L O R E〉のリーダーであるサキュバス族のお姫様であるエミリアが照れ隠しになっていない激励を送ってくる。

「御嬢様も素直でございませぬね…ついて行こうと思えば今すぐにもミカミ師の世界に行けるといふのに…」

「フォークロアはガーネットが一時的に抜けると宣言した後も尚人氣が凄くて衰えないからな。

リーダーの責任感だろ」

「それもそうですかね…」

「ていうかそう言うあるふあも行きたいんじゃないわふ〜？」

「こ、こらサルサ！わたくしは別にそこまで…」

「あー！あるふあ凄い顔赤くなってるわふよ！」

「そ、そんな事は…」

エミリアの付き人でオートマターのあるふあが主人に毒を吐きながらもそれを仲間の人狼族のサルサにつっこまれる。

ちなみにサルサはこっちでのアイドル活動が好きだからか俺の世界についての興味は薄いようだ。

ま、エミリア達が此方側にやって来ようという時にはしつかりとついて来るのだろうか。

「ふふ、では皆さん私は一足先に先生さんの世界に行つて来ますね！」

恋人のガーネットは学友達にしばしの間の別れを告げるのだった。

「こっちも挨拶は済ませてきたわよ先生！」

「そうか、ルキフェルの様子はどうだった？」

そして俺のもう一人の恋人であるアンジェリカがやってくる。

「ルキの奴やつぱ自主練サボリそうだから念の為に目付け役をロゼッタさんに頼んでおいたわ」

「はは…ロゼッタに説教されるルキフェルの姿が想像出来るなそれは…」

アンジェリカがユニットへSadistic★Candyで組んでいる相方の大の魔法研究好きでよく練習をサボりがちなルキフェルを管理に人一倍厳しいロゼッタが見張っていてくれるならアンジェリカも安心出来るだろうな。

ルキフェルはご愁傷様だけど…

「それじゃあ、行ってきますね」

俺達はこの世界にしばしの別れを告げて元の世界に向かうゲートを潜るのだった。

異世界アイドルティーチャーの帰還と魔女達の初体験PARTⅡ

Sideソナタ

「元の世界よ俺は帰ってきたああー!」

元の世界に帰還して早速ソロモンの悪夢の名台詞風な叫びを上げた。

「此処が先生さんの世界!…」

「私らの世界と風景は割と似ているのね」

俺が元居た世界に初めて足を踏み入れたガーネット達は感想を吐いている。

「それじゃとりあえずまずは戸籍を如何にかしなくちゃいけない!ちよつと待つてくれ」

「はい!」

俺はガーネット達の戸籍を如何にかする為にツテの有る知り合いに久し振りの通話をかけた。

「おうもしもし」

「『そ、ソナタなのかい?!お前二週間も一体何処ほつき歩いてたんだい?!』」

「ちよつと深あーい訳があつてな…その事もあつてソウリ、お前にちよいとばっかし頼みたい事が幾つかあつてな」

「『何?…』」

「実はな…」

俺の友人であるハナカゲ・ソウリは通話をかけてきた事に驚いていた。

どうやら彼方の世界では半年を過ごしていたというのにこっちの世界は二週間しか経過していなかったみたいで不幸中の幸いといえよう。

父親が役所勤めであるソウリからガーネット達の戸籍を如何にか作成して貰えるように依頼したのだ。

彼女達の戸籍の件は流石に即日とはいかなかったがなんとか解決してもらえて一安心：一旦家に帰り顔を見せると両親には物凄く怒られて心配されたけど、恋人であるガーネット達を紹介したら卒倒されたが喜ばれた。(流石に異世界の事とガーネットの正体についてはソウリ以外には話していないが)

両親を安心させた翌日、俺はガーネット達と地元の家電量販店を訪れた。

「うわあ……こんなに大きいお店なんですね！」

「あつちのアイドルグッズ店よりもずっと品数多いじゃない！」

ガーネット達は各々の反応を示す。

喜んでもらえてなによりだ。

向こうの世界でクロ工理事長に造ってもらった通信機はこの世界でも一応は使えるみたいだがやはりこの世界でも友人を作って欲しいから新たに二人のスマホを購入し、最大の目的であるガンプラコーナを覗いていく。

「うわあ！……こんなにも種類が多いんですねガンプラって！」

「選り取りみどりってところね」

「ああ、じっくり見てくれ」

ガンプラの数々を目にしたガーネット達は興奮を隠せないようだ。

まあ、彼女達が知っているのは俺が偶然彼方の世界に持ち込めていたDVDのVガンダムとGガンダムの二作だけだったからな。

ちなみにプレーヤーもクロ工理事長が制作してくれました。

あ、Vガンのトラウマシーンは流石にカット出来る所はカットしたよ。

「そういえば先生の使ってるガンプラってどんな奴なの？」

そこでアンジェリカが俺の愛機について聞いてきた。

「ああ、そういえばガーネット以外には見せた事がなかったけか。

それはコイツさー！」

俺はその事を思い出し愛機を取り出して見せた。

「コレって先生が観せたVガンダムに出てきていた……」

「そうだ、V2ガンダムをベースにフルカスタムビルドしたV2ガン

ダムSAPだよ！」

「凄っ！…流石にド素人の私でも出来の良さが理解出来るわこれは…」

V2SAPを目にしたアンジェリカは素直にそう感想を述べた。

「それなら私も先生さんと似たようなガンダムが良いです！」

「そうか、それならこっちなだな」

ガーネットがそう言い出したので俺はVガン関係のコーナーへと彼女を案内した。

「うーん…」

ガーネットは陳列されたガンプラを真剣な表情で選んでいる。

「ん？先生さんこのガンプラ…」

「それは！…」

そんなガーネットが手にしたのはあの機体だった。

「EMS—TCO2 ファントムガンダム！…」

彼女が惹かれたのはクロスボーンゴーストに登場したV2ガンダムの前身、プロトタイプとでもいうべきファントムガンダムだった。

正に「幽霊」であるガーネットがシンパシーを感じるのも無理はない。

「先生のV2と似ているわね」

「ああその機体はV2が開発される以前に造られたいわば秘蔵っ子みたいな立ち位置な機体だからな」

劇中だと要のミノフスキードライブ周辺が未完成であった為に後の発展型であるゴーストガンダムでもV2の六、七割くらいのパワーしか出せなかったとされたがガンプラの可能性は無限大。

ビルド次第で上位互換機を軽く凌駕出来る可能性を秘める。

「決めました私はコレにします！」

ガーネットは嬉しそうな表情をしながらファントムの箱を手に取りのだった。

一方のアンジェリカはというと…

「ねえ先生、こっちの小さいのはどんななの？」

彼女が見ていたのはSD系コーナーだった。

「ああ、そっちはSDだね。」

既存の奴をそのままスケールダウンさせたものや独自の世界観と歴史上の人物を当て嵌めたシリーズの物があるんだよ。

その制作し易さと地味にアニメ人気もあつて割かし女性人気の方が高いかな」

「そうなんだ…だったらコレかな」

アンジェリカが手にしたのはSDガンダムワールド三国創傑伝に出てくる張□アルトロン（ナタク）ガンダムだった。

「真逆のそれか」

「なんかビビっときたんだよねえー」

意外な選択に驚きはしたがSD系を使うならとトリニティバイクもアンジェリカに勧めて購入後、ビルドスペースへと向かい彼女達に簡易的なビルドスキルを教えるのだった。

そして帰宅後に本格的なビルドスキルを教え込み完成はアンジェリカは一日、ガーネットは一週間程度かかった。

異世界アイドルとティーチャーは地区予選に出場するPARTI

Sideソナタ

「今日から遂に全国大会への切符を手にする為の全国地区予選バトルトーナメントが開始される！」

「こんぴゅーター？相手ばっかだから漸くね！」

「凄くドキドキしますね！」

ガーネット達を俺の通っている我梅学園に編入させて一通りの縦訓練をした後、地区予選トーナメントへの選手登録を済ませ遂に初戦の開始日が訪れた。

チーム名は「L a p i s : i」だ。

「さてとトーナメントの組み合わせはつと…は？…」

「どうしたんですか？」

早速バトル会場へと向かいトーナメント表を見てみると俺は目を丸くした。

「いや…初戦で同じ学園のチームとあたったみたいだ」

「え？」

「まあ、同じ学校から複数のチームが出るのは別に禁止されていないし…トーナメントブロックが重なったりすればこういう事もありえるというか初戦これもらったな」

俺のチームバトルはこれが人生初となる為に同じ学園のチーム勢の事をすっかり忘れていた。

その相手は…

「ほう？真逆我々と同じ学園の生徒とあたるとはな」

「だが同じ学園だからといって全国大会への切符は渡さんぞ！また再び我々が手にするのだからな！」

「今度こそガンプラ学園や全国の猛者共を打倒し頂点へと立つ為に！」

「ジーク・ジオン！」

「それはどうかな?」

「何?」

チームホワイトウルフ、高機動型マツナガザクを筆頭にしたザクシリーズの連携で此れ迄に四度の全国大会への出場を果たしている実力者チームではあるのだが…それはバトル中に語ろう。

GPベースを操作しバトル準備に入る。

「ミカミ・ソナタ、V2ガンダムSAPいくぞ!」

「ガーネット、ファントムクロアガンダムBBいきます!」

「アンジェリカ、張恰アルトロンガンダム・アンジェちゃん☆ multicaster ムいくよ!」

バトルフィールドは森林多めの荒野ステージか。

「敵は…あそこだな!」

「なら私が出っ込んで敵をひきつけるわ!」

「そうだな、頼む!」

アンジェリカのアルトロンが先行突撃を買って出たので任せる事にした。

Sideアンジェリカ

「見えてきた! 此処からなら! だらっしやあああー! ☆」

アンジェちゃんお手製スペシャルマシンであるトリニティエンジェルを駆って敵からギリギリ見えないであろう地点で私はビームトライデントを思いっ切り投擲した。

「ぐわ!…!」

「な、何だと!」

「一体何処から!」

「あそこだ!」

「いかん!? 待つんだ! SDだからといって迂闊に近付けば…」

投擲したトライデントがホワイトウルフのザクの一機が構えていたマシンガンを貫いた。

それに驚くがすぐに冷静さを取り戻したのか漸く私のアルトロンを見つけたザクがヒートホークを構えて突っ込んでくる。

リーダーが静止するがもう遅い。

「ラヴァーゴンハング！」

『なっ!?…SDが俺のザク・アルヴァルデイのパワーを上回るだ?!? うおおお!』

「そんな必要最低限の改造しかしていない奴に負ける程私のアルトロンは甘くないわ！」

私はトリニティエンジェルに乗ったままアルトロンの桃色の伸縮自在のドラゴンの腕を伸ばして突っ込んできたザクを掴み上げて空高く放り投げた。

「ラヴァーゴンブレイク・アンジエちゃんスペシャル！」

そして落下してくるザクに向けてハングの怒涛の連撃を浴びせて上半身のアーマーを半壊に追い込んだ。

追い打ちとばかりにトリニティエンジェルに装備されている機関砲を撃ち込んだ。

『こ、こんな馬鹿な事が!?…マツナガリーダー後は頼みました…!』

『アルヴァルデイが!』

『コシバ! 糞っ!?…』

真逆こうも早くに倒されるとは思っていなかったのか動揺を見せる。

「其処だあー！」

『なっ!? さ、散開するんだ!』

『りよ、了解!』

動揺している隙にソナタ先生のV2が装備しているロングレンジファンネルを撃ち込む。

がすぐに気が付いたマツナガザクの指示によってすんでの所で回避される。

まんまと先生の策にかかったようね…散開し離散したイカみみたいなザクを使っている奴の背後にガーネットが駆るファントムが佇んでいた。

Sideガーネット

「うっふっふー…」

『なっ!?…何時の間に後ろに!?…この!』

先生さんの策にまんまと嵌まったイカさんみたいなザクの背後に私のファントムは回り込む。

そこで漸く策に嵌まってしまっていたのだと気が付いたようですけどもう遅いですよ。

「無駄ですよ？その程度の実力で先生さんと私達の前に立ちほだからうなんて甘いのですよ！」

「ほざけ！小娘に負ける程ヤワな男ではないぞ！」

イカさんザクは脚部のサイコミュ兵器によるオールレンジ攻撃を繰り返してこようとしてきますが私は冷静にファントムのクジヤクを構えて対応します。

「えい♪」

「ば、馬鹿な!?…俺のザク・クラークンのオールレンジ攻撃をこうもあっさり?!?…!？」

「先生さんからのラブコール以外は一切受け付けませんので…それではこれで終わりです！」

フレイムソードを振るいイカさんザクの脚部を丸毎斬り落とす。

「BBバスター・乱れ撃ちです！」

「ち、ちくしよおおー!?!?…!？」

ダブルバタフライバスターの乱れ撃ちを受けてイカさんザクは木っ端微塵になっていった。

Sideソナタ

「何!?ウズキまでもがやられた!?…!？」

「呆けている場合じゃないぜ?！」

「むう!?!?…!？」

ガーネットも敵を撃墜したようだ。

俺はマツナガザクと鏢迫り合いを繰り返している。

「こうなれば仕方あるまい!…!？」

「!」

パワー負けしていると悟ったマツナガザクはヒートホークの片方を投げ捨てて横綱の様なポーリングを取り始めた。

「我が必殺の一撃受けてみるが良い!」

「へえ、だったらコイツを受けてみやがれ！ロングレンジダブルファンネル!!」

対する俺はV2の両腕に装備しているロングレンジファンネルを射出する。

『重力下でファンネルを使うだ?!』

『不安定だと思ったのか？甘いんだよ！』

『なんと!?!有線式に切り替えておったのか!?!だが!ぬうん!』

そう、既に重力下の大きいステージでも問題無く使用可能な有線ケーブルを繋ぎ切り替え済だった。

それを理解して尚マツナガザクはヒートホークに力を込める。

『はああああー!』

『せああああああー!』

俺の有線ファンネルビームサーベルモードとマツナガザクのヒートホークが激しくぶつかり合う。

『むう!?!』

このままでは流石に又パワー負けしてしまいかねないと思ったのか先程投げ捨てていたものは別の武装を急いで取り出す。

ありやあ小型ビームアックスか。

だけど!

『そんな武装で俺のファンネルサーベルは止められねえよ!』

『なんと!?!ぐぬううう!?!』

一気にファンネルサーベルを振りぬいてマツナガザクの武装を弾き飛ばした。

武装を弾き飛ばされた事で大きくバランスを崩して後方に転倒するマツナガザクに好機を見出す。

『今だーファンネルサーベル最大パワー!』

射出していたファンネルサーベルを呼び戻し俺は奴の懐へ急接近して思いつ切り振りぬいて突き刺した。

『…見事だった!…学園の命運は君達に託したぞ!…』

『言われなくても!』

マツナガザクは真つ二つになると同時に俺達にその意思を託した

のだった。

〈B A T O L E E N D E D 〉

『おおーっとおお!? 此れ迄に四年連続で全国選手権トーナメントに駒を進めていたチームホワイトウルフが此処で真逆の地区予選初戦敗退ー!』

予想外の番狂わせだあ! そして見事彼等から勝利をもぎ取ったのは同じ我梅学園からの初出場であるチームL a p i s : i だあああああ
ああー!』

俺達の勝利を告げる実況アナウンスが響き渡り地区予選初日は大いに盛り上がるのだった。

異世界アイドルとティーチャーは地区予選に出場するPARTⅡ

Sideソナタ

『さあさあ遂に来たるべき時がやってきました！九州地区鹿児島代表を決めるガン普拉バトルーナメント決勝戦！』

この決勝の舞台に勝ち上がって来たチームを御紹介しましょう！

まずは地区優勝候補だったチームホワイトウルフを初戦で破り、その後も着々と駒を進めた初出場であるチームLapis…i!』

「…」
白狼チームとのバトル以降ぱつとしない戦いばかりが続き俺達はそれぞれの奥の手を使う事も無いとも容易く決勝迄駒を進めていた。

まあこのレベルだとあのチームが勝ち上がってこれていたのには納得だな。

『そんな期待のルーキーと決戦の火蓋をきりますは前年度からの出場場で惜しくもアクシデントにより準優勝であった千導学園のチーム・

Mヴァンガー!』

「フオー!」

「フツ!…」

「ど、どうも!」

実況のアナウンスで向こう側から三人の男性が現れる。

つうかその内の一人動きが凄くキメエ!?

そして出撃準備に入る。

「!来るぞ!」

『おわっ!?!』

『私が防ぎます!』

戦場は宇宙ステージ：降り立って即刻ビームが飛来してきたのでガーネットのファントムがバタフライシールドを展開してなんとか

防ぐ。

「腐つても決勝…やはり一筋縄ではいけないか！」

『小手調べとはいえうちのシヨー・ジョーカーのガンダム4号機フルカスタムの狙撃を防ぐとはやるな！』

漸くガチで戦り合えるつてもものだ！』

敵チームリーダーから称賛のチャットが入る。

どうやら今の狙撃はあのキモイ動きをしたた軟体男が駆るガンダム4号機による高出力スナイパービームライフルによるものだったようだ。

最大出力で撃たれていたら危なかったな。

「一応聞いておくが実況が言っていたアクシデントとは何だ？」

俺はふと気になった事をMヴァンガーのリーダーに聞いてみる。

『えっと…アイジ・セント、このガンダムCXブラスタブレードのファイターです。僕から説明しますね…実は…うちのチームリーダーであるカイジ・トジキさんは去年の決勝戦が始まる前に出場を蹴ってしまったんですよ…』

GXの改造機を駆るちよつと弱気そうな少年がそう説明した。

「理由を聞いても？」

『…なあに至って単純な理由さ…この地区のレベルが低過ぎてファイトする気が起きなかった…只それだけだ…』

元の前よりもかなり紅黒いガンダムエピオンを駆る向こうのリーダーはそう語った。

成程ね…周りがあまりにもレベルが違い過ぎて逆にやる気を喪失してしまつたパターンか。

『だがよ今回は違う…優勝候補といわれていたあの白狼を初戦で破つたお前達を目の当たりにして非常に戦いたくて仕方無いんだよ！』

まずは俺のガンダムエピオン・オーヴァーロードがお前達を倒す！
そして全国の強者達と戦いてえんだ！』

『うわあ…』

向こうのリーダーの言葉にアンジェリカが若干引いてた。

「そういう事か…だが俺達という壁を崩せるかな？」

ガーネットはあのエピオンを、アンジェリカは4号機を頼む！

俺はGXを相手する！」

『うへえ…私がアレとやり合えてんの…』』

『文句は駄目ですよアンジェリカさん、では先生さん行って参りますね！』』

俺が指示を飛ばすとそれぞれ動き出す。

S i d e アンジェリカ

『フォー！キミがこの僕の相手かい！』』

「とつとと倒す！」

『そう簡単にいくかな?!』』

「なっ!?…!」

キモイ動きをしていた4号機から本来無い筈の武装の数々が出現する。

「よりもよつて全部乗せええええ!」

『『コイツの射撃の嵐、キミに掻い潜れるかな?』』

「おわつと!?…!」

5号機のガトリング、7号機の肩部キャノンを交互に撃ち、ビームスナイパーライフルで狙ってくる。

私はきちんと宇宙仕様にしているアンジエちゃんスペシャルトリニティエンジェルを吹かしながら回避する。

「こうなったら…ゴメンねクロエ！先に使わせてもらおうわ！」

私はクロエがこの世界に来た時の事を考えて一足先に彼女専用で作っておいた武装の一部を借りる事にした。

「うらああああー！もっていきやがれやこらあああー！」

トリニティエンジェルの後部サイドにマウントしてある鎌を抜いてブン投げる。

続け様にトライデントも投擲して弾丸の嵐を処理した。

『『や、やるねえ〜！…でも…』』

「余所見してていいのかしら?」

『『フォオ?...』』

弾丸の嵐を掻い潜られても平静を崩さない4号機だったが私の一言で漸く気が付く。

自身の武装が斬り落とされていた事に。

『フオオオー!?!SDの武装でこの僕の弾丸を処理した上で尚機能が生きていた!?!』

ブーメランの様に舞い戻りながらこっちの武装を!?!:~:~:~:』

『そういう事!?!とつとと終わらせたいって言ったでしょう!』

これでトドメよ!』

ラヴァーゴンハングの籠手部位をトリニティエンジェルの前面サイドに装着させて加速する。

『ヘラヴァーゴントリニティブレイク!』

『フオオオー!?!:~:~:~:』

武装の甚大なダメージによって残ったスナイパーライフルさえも上手く扱えず反撃に出る事が不可能になった4号機に私は突撃した。

4号機はハングに貫かれて爆散したのだった。

異世界アイドルとティーチャーは地区予選に出場するPARTⅢ

アンジェリカが4号機を倒した直後 Sideガーンネット

『ショーがやられたか：まあアホだしなアイツ：にしても俺は正直あのV2と戦り合いたかったんだがな：』

「うふふ…」

『まずはお嬢さんを倒せて事か：クロスボーンX2：いやフアントムガンダムベースのガンプラ：確かに相手にするのに不足は無いな！』

お相手のガンダムエピオンを駆るリーダーさん、えっとカイジ・トジキさんでしたっけ？彼はそんな不満を漏らしますが私のフアントムクロアを目にして考えを変えたようですね。

「BBバスター！」

『甘い！』

私はBBバスターを撃ち放ちますがエピオンは左腕部に搭載してあるビームシールドで防いだ。

『それでも喰らいな！』

そして間髪入れずにエピオンはビームソードを振るってくる。

「喰らいません！」

対する私はビームサーベルの二刀流で受け止める。

『いくら強化しているとはいえどサーベル如きで俺のエピオンの剣を受け止められると思うな！』

「う？…」

ビームサーベルを容易く切り払われてフアントムクロアは大きく後退させられる。

『チエーストオー！』

チャンスと見たエピオンはビームソードを構え直して突撃してくる。

「其方もこの程度で先生さんと私が育んできた愛、そして此処にはい

ないエミリアさん達への友愛を込めて作り出したファントムクロアに勝てると思わないで下さい！

BM（バタフライミラージュ）エフェクト！」

「何!?!」

エピオンのビームソードが当たる寸前に私はファントムクロアのシステムの一つを発動させた。

ファントムクロアの口元が開き分身を生成し始めた。

「コイツは!?!真逆F91の「M・E・P・E」システム!?!いや違う!?!もしかや「ミラージュ・コロロイド」の応用した物か!?!」

「正解です♪」

「クソツ!?!こうなれば!?!」

ビームソードだけでは処理し切れないと悟ったのかエピオンは独自のMA形態のドラゴニックモードに変形する。

「コイツで分身毎薙ぎ払ってやる!ドラゴニックバースト!!」

背部から伸びているドラゴンヘッドからブレスがファントムクロアに向けて放たれる。

「へっ!これでひとたまりもねえ筈!」

「やあああああー!」

「何!?!あの距離で放ったドラゴニックバーストを回避されただど!?!」

そう寸での所で私はファントムクロアをMA形態であるファントムミラージュ（以降FM）モードに変形させて急上昇し回避した。

そしてエピオンが油断していた所にFMモードを解きながら急降下しフレイムソードで斬りかかる。

慌ててMA形態を解いたエピオンにギリギリの所で受け止められる。

「あ、危ねえ!?!このままじゃ駄目みたいだな!?!だったら!」

「!」

エピオンの気迫が高まるのを感じる。

「【オーヴァーZERO】システム発動!さあ、ZEROが見せた予測を超えてみせろ!」

先程よりも素早いスピードでエピオンが接近してくる。

「ただ彼は知らない…：ガーネットの愛の力がZERROの予測を軽々と越えようとは…」

・推奨戦闘BGM「Butterfly（ガーネットソロVer）」

♪

「でしたら此方もいかせて頂きますね！」

怪しく輝く蝶々の如く華麗に舞います！「ファントムクロアバーストライト！」

ファントムクロアの装甲の一部が展開し其処から紫色のビームの奔流が溢れ出していく。

それはまるで黒アゲハ蝶の如く…：これこそが先生さんへの愛とIV KLOAの皆さんへの友愛を込めて共に作り上げたファントムクロアバーストライト！

「うおおおー！ドラゴニックオーバーソードZERO!!」

「ファントムクロアライト・フレイムショット〜!!」

彼のエピオンの一撃に対してリミッター解除したフレイムソードから衝撃波を繰り出し激しくぶつかり合う。

「お、俺の一撃が押し返されている!?…：只の性能底上げされただけのファントムライトじゃ…ぐあ!?!…」

フレイムショットが競り勝ってエピオンのビームソードを弾き飛ばした。

そこへすかさず私は彼の懐へと接近する。

「ファントムクロア・バーストハートブレイカー〜!!」

一気にファントムを加速突撃させてエピオンの左腕部を貫いた。

「クッ!?…：俺の完敗か…：そのトンデモねえパワーのクラクリ…：もしかしてAGE-3FXのバーストモードのシステムも使っているな?…」

「良く気が付きましたね」

「あーやっぱりそうか…：次こそはあのV2と戦い合いてえな…：!」

最後の最後でファントムクロアの持ち得たパワーの秘密に気が付いたカイジさんは破壊部位を抑えながら負けを認めたのだった。

異世界アイドルとティチャーは地区予選に出場するPART IV

ガーネットのフロントムクロアがカイジ・トジキの駆るガンダムエピオンドラゴニックオーヴァーロードを下すほんの少し前迄時は遡る Sideソナタ

「いけえー！ロングレンジフィンファンネル！」

「『なんの！ディバイダー！』」

俺のV2と相手のGXのカスタム機が激しくぶつかり合う。

「もう一丁いつとけえー！」

「『下から!?ディバイダーじゃカバーが…だけど！』」

「おっと!?!」

GXはディバイダーを構えながら空いた手でバスターブレードを取り出し俺のファンネルを刺し斬ろうとしてきたのでソードモードに切り替えて対応する。

「『くうっ!…』」

バスターブレードとファンネルソードがぶつかり合う中で俺は違和感を感じる。

奴のバスターブレード相当なビームコーティングが施されているか!

「厄介だな…」

「『そっちもね!』」

その時だった。

ステージ空間に美しい蝶のエフェクトが蒔かれる。

「『これは!…アゲハ蝶のエフェクト?…真逆!?!…』」

「『どうやら向こうの勝敗は決したようだな』」

様子を確認するとガーネットのフロントムクロアがシステムを発動して敵のエピオンの片腕を砕いていた。

「『すまないアイジ…オーヴァーZEROSシステムもやられちゃったみたいだ…』」

『そんな！あのカイジ君が負けるなんて!?!…』

「呆けている場合じゃないぜ?」

チームリーダーが敗北した事に動揺するGXに構わず俺は仕掛ける。

『「こうなったら!…!」』

「来るのか!…!」

相手はGX、此処は宇宙空間つまりは…

『「マイクロウェーブ受信!バスターブレード接続!」

輝け!へサテライトバスターブレード!』

相手のGXはフラッシュシステムにバスターブレードを接続し巨大な剣を顕現させてきた。

「成程、あのヤサカ・マオのオマージュか!

しかし此方も負けてはいないぞ!

こつちには太陽があるのだから!プラフスキーパワーゲート解放!」

推奨戦闘BGM「STANDUP TO THE VICTORY」♪

俺はそう宣言しV2SAPの両腕のファンネルをパージして構えた。

「我が愛機よ!Vの体勢を取れ!そして太陽の光の如く輝けえい!」

『「なっ!?!…それは一体?!」』

V字型のポージングを取ったV2の肩・胸部装甲へと太陽の光が収束されていき白き装甲は紅蓮の熱を持つ。

その光景に奴は驚く。

「お前さんのサテライトと俺が作り上げた「ソルフラッシュシステム」による攻撃の何方が上かはつきりさせようじゃないか!」

『「!…なら証明してあげるよ…サテライトバスターブレードオオー最大出力!」』

俺のサンフラッシュシステムを目にして奴は最大パワーでサテライトバスターブレードを振るってくる。

「フッ!…ならば華麗なるVの衝撃を今こそ魅せよう!へソルティックヴィクトリーフラッシュ!」

V2のV字型装甲からV文字のエネルギービームが照射される。
奴のGXのサテライトバスターブレードと激しくぶつかり合う。

「ぬうおおおおー！」

『くうっ!?…僕のサテライトバスターブレードの全力が押されている!?…うああっ!?…』

俺の放ったソルティックヴィクトリーフラッシュが奴のサテライトバスターブレードを押し切りビームが直撃し奴の機体は小惑星に叩き付けられて其処にはV字の痕が刻まれた。

「ううーむー！本日のVも見事に華麗なり！」

俺は体勢を解除し感涙に浸りながらも奴に迫る。

『くっ!?…だけどまだ…』

「させると思ってるのか？光の翼!!」

『は、早い!…うわあああー!?!…』

既に半壊状態のGXは悪足掻きにと唯一無事だったデイバイダーを放とうとしてきたが俺は光の翼を発動しトドメを刺した。

〈BATTLE ENDED〉

『つ、遂に決着！激闘を制し見事全国への切符を手にしたのは今年初出場してきた我梅学園のもう一つのチームLapis:iだあああー！おめでとうございますー！』

優勝を告げるアナウンスが鳴り渡り観客達は大いに盛り上がるのだった。

Gミューズバトルフェスティバル！PART I

ミカミ・ソナタが率いるチームLapis:iが地区予選での優勝を勝ち取ったその頃

Side?

「ブワハハハ！これで今度のイベントでお披露目予定の機体群は完成だああああー！」

「しっかしよくGミューズなんてデカイ店借りられたな」

「いくら大きいとはいっても一部のマニアしか人が少ないっていうスペースはやはり存在しちやいますからね…其処を有効活用してもらえらならお店側にとっても有益でしょうからー！」

「其処で私達も特別ライブを行う事になっているんだよね？」

「ああ、つい最近になってプラモアイドルの活動も盛んになってきたからな。」

やはり先見の目よお！っとリカ、椿さん達には連絡ついているよな？」

「バツチリだよ！」

「そうか、ならば後は各自備えるだけだな！」

それから数日後、Sideサイガ

「Gミューズに行くんですか？」

「そうよ、私は扱うガンプラ変更したいしセカイ君にはもっと勉強してもらわなくちゃいけないから丁度良いと思ってね」

「俺達も行きますよ」

という訳で俺達はプラモビルダーの常連店の一つであるGミューズを訪れたのだが…

「人が多いですね！」

「いや、いくら御用達の店とはいえ此処迄の客の規模は…今日ってショップ大会か何かあったけ？」

「いえ、今日は特に何も確認しては…」

「ん？なんかあるみたいだぜ？」

明らかに普段よりも規模の大きい客の数を見て俺は不思議に感じ

たのでユウマに聞くと彼は知らないと答えるがそこでセカイが店に掲示してあるポスターを見つける。

「何々…『モモガミ・ダイアプレゼンツ 新作プラモ発表会、トライアルSPバトルイベント&特別DJライブ』…ってこれって…」

「モモガミ・ダイアって確かあの話題の動画の!?!」

「どうやら数日前からネットにて告知されていたみたいですね…」

「ま、マジかよ!…」

「そんなに凄え人なんすか?」

「凄いなんでもものじゃない!まさしく大天才といっても過言ではない人物さ!」

俺達はそれを見て絶句した。

只一人知らないセカイにユウマが説明する。

「という事はあのPhoton Maidenの皆さんも此処にやって来ていらっしやるという事ですよね!」

「ああ、急ではあるが何方も又とない俺達にとっても良い機会なのは違うない!早速俺達も並ぼう!」

俺達は急ぎ並ぶ事にした。

其処で

「なあ、アンタ達もついさつき知ったってどこか?」

「ん?」

前に並んでいた青年に声をかけられる。

「ああ、仲間がちよつと用があつてね…」

「そっか、俺はミカミ・ソナタ、チームLapis:iのリーダーだ」
青年はそう名乗ってきたのだった。